

リハビリテーション各領域の 連携をめざして



日本リハビリテーション連携科学学会 理事長 三澤 義一

このたび、日本リハビリテーション連携科学学会の創立に当たり、図らずも理事長を仰せつかりました。何分にもはなはだ微力のため、その任に耐えるかどうか不安がありますが、皆様のご助力を得て大任を全うしたく思っておりますので、よろしく願い申し上げます。

さて、戦後の昭和20年代に細々と始められたわが国のリハビリテーションは、時代の進展とともに著しく進歩し、最近の足取りには目をみはるものがあります。医学、教育、社会、職業などの各分野における研究と実践の成果の蓄積は、今や質的にも量的にも莫大なものとなりました。各分野において、種々の困難を克服されつつ逞しい歩みを続けてこられた皆様のご努力に対して、深く敬意を表する次第でございます。

申すまでもなく、来るべき21世紀には、かつて経験したことのない大きな社会的変動が訪れることでしょう。少子・高齢化という一断面だけを捉えても、社会の姿は想像以上にきびしいものになると思われます。それに伴って、リハビリテーションのニーズが飛躍的に増大することも疑いのないところです。そこに対応できるリハビリテーション研究はいかにあるべきか。この問題を真剣に追究しなくてはならないと思います。

研究・実践の道程における過度の専門分化は、ともすれば相互の関連に目がかすみ、独走する危険をはらんでおります。しかしリハビリテーションが目標とするところは、あくまで個々の人の生

活にその成果を総合的に反映させることに他なりません。分化と統合という命題は、学問の発展の過程で絶えず念頭におくべきですが、学際性を要求されるリハビリテーションの分野では、なおさらその大切さが強調されるべきでしょう。そのため、各専門家や専門領域の関係にも、一層のバリアフリー化が求められるといってもよいと思います。

日本リハビリテーション連携科学学会は、研究者・実践者の共通の広場として、研究交流と相互理解を促進するために発足いたしました。われわれの心の中には、永い間慣れ親しんできた縦割の発想が深く根づいており、そこに安住するほうが無難と考えることも多いと思います。しかしときには横の連携も絶対に必要欠くべからざるものと思います。調和のとれた統合化がなくてはならないといえましょう。

リハビリテーションの目標は、単なる延命ではなく、人生の持ち時間に生命を吹き込むことであるといわれております。そのためには社会生活力を育成し回復させ、一人ひとりの人生に可能な最後まで華を咲かせることを念願としております。

各分野のそれぞれの一層のご発展をお祈りするとともに

に、リハビリテーションマインドに支えられた共通の舞台として、本学会が成長発展できますように、皆様のご支援を切にお願い申し上げます。